信仰と地名

染矢多喜男

私達は民族の信仰についてどれだけのことを知つているであろうか。もし外国人から日本民族は仏教徒なのか、神道の信者なのか。仏とは神とはと問かれた場合、何人が答えることができるであろうか。それほど私達は民族の信仰について知つていない。その一因は私達が信仰から離れ去つているためであろうが、またわが国教育の欠陥も重要な一因を担つているように思える。私達はこれまで民族の信仰について、ほとんど何も習わなかつたといつてよいかも知れない。日本史では仏教についてはかなり記述されている。しかし、果たして日本民族の信仰は仏教が中心であつたであろうか。注意深い人は仏教特に大教団を形成している真宗が、一般庶民に滲透してくるのは、やつと室町中期以降であることに気付いているであろう。それにもかかわらず、なぜ神への信仰は怪くあつかわれているのであろうか。たとえば、山村では祠を最も多く見かける山神は日本史のどこにも記されていない。そこで、私は地名をたよりにどのような神仏が、一般庶民に信仰されていたのか次に記してみよう。地名は必ずしも過去の信仰の実態を忠実に伝えるものではないかも知れないが、何かを示してくれることと思う。

信仰関係の地名として神仏名を冠する小字名を集めてみた。郡市別に分布を記すことは煩雑なので、市は旧所属の郡に含ませて郡別分布表を作製した（別表）。表で明らかなように、十二以上のものは二十五種ある。種類は宇佐・大分両郡が最も多く二十五種中二十二種で、最も少ないのは玖珠郡の八種である。総数は南海部郡が最も多く、宇佐・大分・大野郡が僅かの差で続き、下毛・直入・玖珠郡がきわだつて少ない。種類と総数がともに多い郡は、文化が進み信仰生活の豊富さを示すものと考えられる。宇佐・大分両郡が種類・総数の両者で多いことは、この推測を裏付けていよう。これに反して、直入・玖珠両郡

信仰地名分布表

順位	地名＼郡名＼地区名	豐前 下毛郡	豐前 宇佐郡	豐後 西國東郡	豐後 東國東郡	中部 速見郡	中部 大分郡	海部 北海部郡	海部 南海部郡	豐肥 大野郡	豐肥 直入郡	大久 玖珠郡	大久 日田郡	總計
1	山神	13	11	13	23	12	14	20	23	17	5	4	16	171
2	天神	4	8	6	6	10	20	21	25	23	10	4	17	154
3	地藏	3	12	3	5	6	11	11	16	9	0	0	10	86
4	年神	2	5	4	5	9	8	8	8	23	1	1	11	85
5	妙見	2	10	7	8	4	5	5	4	15	4	2	4	70
6	貴船	4	7	9	15	7	3	2	0	0	0	1	1	49
7	庚申	0	4	0	7	11	4	4	8	2	0	0	0	40
8	塞神	4	14	3	1	1	4	2	2	1	1	0	3	36
9	権現	0	6	0	5	1	4	4	6	2	0	0	1	29
10	觀音	1	5	2	0	2	2	7	6	3	0	0	0	28
11	竜王	3	1	1	0	2	6	9	0	3	2	0	0	27
12	薬師	2	3	3	1	8	4	1	3	0	0	0	2	27
13	明神	0	4	2	2	3	8	1	2	2	0	0	1	25
14	御靈	4	2	1	2	1	4	4	1	1	1	0	2	23
15	蛭子	1	6	1	1	0	2	2	9	0	0	0	0	22
16	伊勢堂	6	3	6	3	0	1	0	0	0	0	0	0	19
17	牛王	3	0	2	4	1	2	1	4	0	0	1	1	19
18	稲荷	1	3	2	4	1	2	1	1	0	2	0	0	17
19	祇園	1	2	0	2	0	1	2	1	2	2	2	1	16
20	不動	2	5	2	0	0	1	1	0	2	3	0	0	16
21	弁才天	1	1	4	0	4	6	0	0	0	0	0	0	16
22	阿弥陀	0	2	3	1	2	0	0	1	0	2	0	2	13
23	王子	0	0	0	2	4	2	0	2	3	0	0	0	13
24	今宮	1	1	1	1	2	0	2	1	2	0	0	0	11
25	山王	0	0	0	2	0	0	2	2	3	1	1	0	11
	種類	19	22	20	21	20	22	21	20	17	12	8	14	25
	總計	58	115	75	100	91	114	110	125	113	34	16	72	
26	小一郎	2	5	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	9
27	道祖	3	3	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	8
	神田	10	26	16	8	12	10	6	2	7	6	2	10	115
	宮田	0	1	0	0	1	13	9	5	19	3	1	2	54

の如く種類と総数の少ない郡は文化の遅れを示しているといえよう。しかし、南海部・大野両郡のように、種類に比して総数の多い郡は、信仰の単純さと強烈さを示していると見ることができる。

次に数の多い順に、信仰や分布を検討してみよう。信仰については門外漢なので、神仏の機能や変遷については、平凡社の世界大百科事典を主として参考にした。最も多いのは「山神」である。山神は山を守護しまたは支配する神として信仰された。山林に生活資料を仰がなければならなかつた人々は、神秘な怪異に満ちた山林に畏怖を感じ、山を支配する神に絶大な敬虔を捧げて、一切の邪悪からの保護と幸の保障を願つた。山神は農民にとつては、単なる山神ではなく、春には山から里に下つて田の神となり、秋の収穫が済むとまた山に帰るという、農事的機能の故に信仰された。しかし、山稼ぎの人々の信じる山神にはそういつた性格はなく、信仰的にかなり違つた内容があるようである。地名上では何れの山神がより多いか、どこに多いかは判然としない。何れにしろ、祭日には山稼ぎに出るのを厳に戒しめており、犯して山に入れば災厄ありと説いている。地名は県下全域に分布しているが、南海部郡を中心として隣接諸郡に多く、県北では東国東郡に目立つている。これほど庶民の信仰篤かつた山神も、智慧という太陽が山林を照射するにつれ、山神の領域はせばめられ、神威は昔語りになつている。「天神」は「山神」に続いて、三位以下を大きく引き離している。天神は一般に信じられているように、文の神としての菅原道真が祭られているのではあるまい。歌よりも田を作ることに追われていた農民にとつては、高尚な御利益は必要ではなかつた。元来、天神とは国津神に対する天津神の総称で、各地に天神を祭つた神社が多かつたが、その天神が道真を祭つたものと解されるようになつたのは、平安時代の中期以後のことである。それは悲運な晩年を送つた道真の怨霊が疫病を流行させたと考えられ、北野の天神がその霊を鎮める役を果たしたことに由来している。怨恨神は反面これを信じて帰依するものには、特に被護を加えて災厄をまぬがれしめるとの信仰が伴なつている。天神信仰はその後祈れば必ず感応がある慈悲の神として、後世の救いさえも祈願されるようになり、各地にあつた天神社の神体は道真に統一されるようになつた。しかし、農民の間に広汎な信仰を獲得したのは、天神の持つ農神的側面によることを忘れることはできまい。稲妻の語が示すように雷は稲と関連が

あり、雷は田に水を与えて天に帰る神でもあつた。道真の霊が雷神と結びつけられたのも、北野天神に始まるようである。「天神」も「山神」とほぼ同じ分布を示し、全県的ではあるが、特に南海部郡を中心として隣接諸郡に多い。ただ東国東郡では「山神」の場合と異なつて多くない。「山神」の多い大分・北海部・南海部・大野四郡の比率は約四割であるが、「天神」ではこの四郡は全体の約六割を占め、集中度が高くなつている。第三位の「地蔵」は仏教関係中の第一位で、いかに平安時代以来の地蔵信仰が、広く庶民層に浸み込んでいたかを示している。このような広汎な地蔵信仰は、強烈な欣求浄土の思想に支えられているが、また固有の塞神信仰が背景になつていることを無視できまい。境の神の信仰が橋渡しとなつて、六道の辻に立つて冥界の責苦から救つて呉れる地蔵への救いを求める信仰が広まつた。江戸時代には、地蔵は塞神の本地であるという説も作られ、塞神の機能であつた旅行安全・疫病防止・子育て・縁結びなどまでが地蔵の機能となつた。「地蔵」も「山神」・「天神」と同様な分布であるが、宇佐郡の多いのが目立つている。地蔵と同じく境界を支配する神には、「塞神」・「道祖」・「愛宕」がある。「塞神」・「道祖」は「地蔵」と対照的な分布を示して県北に著しい。特に宇佐郡における「塞神」は他を大きく引き離している。塞神は地蔵の所でふれたように、境界を支配する固有の神である。塞はさえぎるの意味で、元来は境を守り悪霊を入れないというのが、この神の主たる機能であつた。それがやがて旅行安全や、縁結びから子育ての神へと発展したものである。「道祖」は古代中国の旅行安全神に由来している。日本に渡来して塞神と融合し、塞神は道祖神と宛てられるようになつた。「年神」は年の神であるとともに稔の神でもある年神の地名化したものである。年神は穀物霊ことに稲霊から発生した農耕神である。稲作を基本にしてきた我国では、豊作を保障する神として重視され、既に古事記に大年神・御年神・稚年神として記されている。しかし、信仰の衰えは江戸時代には著しくなつていたことは、雑城雑誌に「年の神という小社村に安置すれども、里民何の神にして何の為に崇祀するということを弁知するもの稀なれば、唯村里の地を費し、其境内の樹木枝葉繁茂し、耕種の妨をなすとのみ心得て、竟には祭祀も廃するに至る処少からず……」とあることによつて知りうる。「妙見」は北斗七星の本地であり、国土を守り災を消し敵をしりぞけ、人の福寿を増益しようと誓願したという妙見菩薩に起因している

が、仏教よりは道教に由来する所が多いという。中世以後日蓮宗で尊崇され、眼病全治に霊験があるといわれた。妙見と同じく、万病を治癒し寿命を伸ばし、特に眼病への治癒に効験があると信じられている仏に薬師がある。薬師は東方に想像される極楽世界である浄瑠璃世界の教主で、我国でも仏教伝来とともに篤く信仰された。特に中世に入つて、仏教民衆化の一般的傾向に伴なつていつそう促進され、各地に霊験あらたかな薬師がまつられるようになり、特定の宗派に関係なく信仰された。「妙見」は大野・宇佐両郡に中心があり、全郡に分布しているが、「薬師」は豊肥・久大両地区では皆無に近く、中心は県中部の速見・大分両郡に著しい。第六位の「貴船」は「龍王」とともに、稲作農耕には欠くことのできない水を司る神である。貴船神は賀茂川の上流にあるので川上の神ともいわれ、高おかみの神を祭る。祈雨および止雨に霊験があるというので、平安時代の頃から朝野の崇敬が篤かつた。龍王は中国に於て、仏教信仰の八大龍王とも結びついて、龍族の支配者と考えられるようになつた。雲をおこし雨を降らせる力を持ち、雷電や河海をも司ると信じられた。同様な機能を持つので異なつた地域に分布している。「貴船」は東国東郡を中心として県北部に著しく、「龍王」は北海部・大分両郡に目立つている。「庚申」は道教の庚申信仰に基づいている。庚申に際し三匹の虫が睡眠中の身体から抜け出て昇天し、天帝にその人の罪過を報ずるので生命を奪われる。それで、この夜は戒慎して諸善を行なうべきだという信仰である。この信仰に猿が結びついた典型は、日吉山王の信仰との習合で、室町後期に現われはじめ、供養の塔や碑が建てられた。近世の庚申待は猿と関係なく、青面金剛の姿が庚申様と観念されるのが普通である。また猿田彦への連想から道祖神とも習合し、庚申塔を道祖神の碑のように扱つた例もあるという。「庚申」は別府湾から南の豊後水道沿岸の郡に多く、「塞神」・「道祖」圏の県北と「地蔵」圏の県南との中間を埋めているように思える。「権現」は「庚申」と同様な分布を示している。権現とは神仏の称号の一種で、元来は権（かり）に現われるという意味である。仏や菩薩が衆生を救い導くため、地上に姿を現わすというヒンドウー教の神の権化信仰が、日本の本地垂迹説と結合し、固有の神々にも多くの権現の称をつけて、神にして仏の性格を兼ねさせるようになり、さかんな権現信仰を生んだ。「権現」がどの権現であるかは未だ調査していない。「観音」は海部地区に著しい。観音は略称で、古くは光世音（世

に光を与える名の持主）または観世音（悩める衆生の音声をみそなわす人）とも訳された。いずれも菩薩の慈悲を代表する名である。飛鳥時代以来盛んに信仰されたが、特に平安中期以後、浄土教の興隆にともなってその信仰はいよいよ民衆化し、地蔵信仰とならんで最も庶民の信仰を獲得したという。県南の海部地区に特に多いのは、熊野信仰との習合のためであろうか。または天神が観音の化現であるという信仰も行われたというから、天神信仰とのつながりも考えられるかも知れない。「明神」は中部地区に多い。名社の神明の意である名神が、同音のため明神と記されるようになつたものである。多くの神社の中でも特にその霊験の優れた神をさしていう。古代では国家の大事にあたり、奉幣・祈願・奉賽・寄進が行なわれた。神名式には三〇六座（二二四社）が記され、殆んどは官社であつた。大分郡に多いのは国府の所在していたことと関係が深いのかも知れない。「御霊」は数の少ない割りには広く分布し、特に集中している地区はない。御霊信仰に由来する地名である。御霊はみたまを意味し、実在した人の霊を祭つたのであるが、平安時代に入つて意味が変化した。無実の罪で死んだ人の怨霊を畏れて、御霊会を営んでその災を除こうとするようになつた。菅原道真の霊を祭つたという天満天神が、御霊信仰の発達に与えた影響は大きかつた。鎌倉時代以後は荒武者が御霊として祭られることが盛んとなり、五郎宮と呼ばれる例は多い。「蛭子」は海部地区に半数が集中している。蛭子（夷）信仰の形成に漁民の果たした役割がいかに大きかつたかを物語るであろう。夷は異民族を指す古語であつたが、漁民や辺境者をも意味していた。そして大黒とともに福神の一つである。魚を抱いたエビスの信仰の発展に大きく貢献した西宮の神人百太夫の一派は、海部（蜑）の系譜を引いていたという。蛭子は漁民ばかりではなく、農民や商人にも幸福を招来する神として広く信仰されるようになつた。「伊勢堂」は伊勢皇大神信仰に関係がある。周知のように伊勢神宮は天照大神を祭神とし、皇室の宗廟としてならびない崇敬を受けた。中世以後は御師の活動とともに庶民の間にも広まり、近世に入つてお蔭まいりや抜参りのような神宮独特の群参りが行なわれた。また伊勢講が全国的に組織された。「伊勢堂」が殆んど県北に集中しているのは興味深いことである。「牛王」は「稲荷」・「祇園」とともに数が少ないわりには、「伊勢堂」とは対照的に全県的に分布している。災厄を除く呪符である牛王の発行所が地名化したものであろう。牛王は

社寺で出す一種の護符で、熊野の牛王は古来有名であり、熊野の神使と信じられている烏の姿を符札に刻印してある。鎌倉時代には武士の間に起請文を書くのに盛んに使用された。農民は柳・竹の先などに挾んで田畑に立て、風除けや虫除けのまじないにした。「稲荷」は比較的県北に多い。稲荷の名が稲生（いねなり）から来たといわれるほど農神的性格を持つから、年神信仰にかわつたものであろう。稲荷神は秦氏と特別な関係を持ち、後に真言密教と習合して東寺の鎮守神として信仰された。近世になると、除災招福の神として卜占・予言・その他の機能を発揮するようになつた。「祇園」は全県的に一様に分布して目立つて多い地区はない。牛頭天王の信仰に始まるが、その由来は必ずしも明確ではない。本来は疫病神で信仰者に疫病を免れさせる機能を持つていた。都における疫病の流行した平安時代には怨霊思想が強まり、祇園信仰もこれに伴なつて発展したようである。

以上比較的数の多い神仏十九について、その機能と分布を簡単に記した。次に一、二の問題点について記してみよう。まず第一にあげたいのは、別表をみて誰もが感ずることだと思うが、「八幡」という地名が見えないことである。表に記してないのはわずか三こしかないためである。八幡の総本社である宇佐八幡が鎮座している本県では奇妙なことである。宇佐八幡は古代以来豊前・豊後に広大な荘園を領有していたから、荘園支配の必要上、かなり多くの八幡社が奉祀されていたはずである。にも拘らず、何故三こしか「八幡」は存在しないのであろうか。この原因を説明する資料を持ち合せないのは残念である。「神田」が「八幡」にかわる地名かとも思うがまだ明らかでない。「神田」は宇佐郡を中心として県北に多く分布し、「宮田」は大野郡を中心としており、両者の複合地域は大分郡のようである。大分郡の「神田」と「宮田」について、その祭神を調べた限りでは、「神田」に鎮座する神社の祭神が八幡であるという結果は出なかつた。すなわち、「神田」と「宮田」は祭神の相違によるものではなく、用語の地域的相違によるということになろう。しかし、この点についてはさらに調査の必要があると思つている。それは「神田」と「宮田」の分布と同様な相違が、信仰上にかなり明確にあらわれているためである。前にも記したように、「山神」・「天神」・「地蔵」は南海部郡に、「年神」・「妙見」は大野郡にそれぞれ中心があり、県北――かつては八

幡信仰圏であつたと思う――には、必ずしもこれらの諸神は多く分布していない。これに対して、宇佐郡または県北に中心があると思われるのは、「塞神」・「伊勢堂」・「不動」・「小一郎」・「道祖」などで、これらの地名は数は少ないが、県北の集中度が著しいものである。このような分布の相違がいかなる理由によるものであるかは、簡単に定められないことであるが、ここに問題を提起しておきたいと思う。

（大分県立舞鶴高校教諭）

染矢多喜男編「地名覚書」

渡　辺　澄　夫

約十年前から県立舞鶴高校染矢氏の指導の下に緻密な努力を続けていた同校地名研究部のクラブ活動の成果に、編者の研究を併せて一書とし世に問うたのが本書である。

第一部はクラブ員の研究成果で、「地名に現われた国東半島の荘園」は、三十一年専修大学の全国高校生徒共同研究コンテストに第一位入賞、文部大臣賞を獲取した力作、「政所の歴史地理的研究」も翌年一位、「地名命名の傾向」は三十五年に二位を獲得したという、類い稀な人々の特異な研究である点に驚かされる。しかも全県下の小字帳を整理分類し、精密な現地調査を実施した科学的方法にさらに頭が下がる。

第一論文は文部大臣賞を獲得しただけあつて、白眉であり、文献や古文書、古記録まで十二分に活用しており、方法論的にも結論的にも非難の打ち処がない。第二の政所の研究は小字帳の整理といい、現地調査といい、その労を多とするが、荘園政所の確認という予想がはづれて、結論が若干もたもたした。しかし「村政所」であるとする結論は、室町、戦国期の大友氏の被官で、庄郷内の名主（給人）の有力者中から任命される代官的役職が政所職で、普通に一荘に二人いた事実に一致するもので、政所研究に一礎石を置いたものとして価値がある。もつと古文書の利用に重心を置いていたらと惜しまれる。

その他、第三論文や、二部三部の染矢氏の永年の研究にも、随所に興味ある指摘があるが、紙巾の都合上紹介の余裕がない。染矢氏の研究は一部本誌にも掲載されたものであるが、多忙な高校生活の間に、師弟一体となつてこうしたユニークな研究を完成されたことに、絶大の敬意と讃辞を送りたい。（一九六二年十一月、東京いずみ書房刊、B六版、三〇二頁、三八〇円、）